天才と凡人

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天才と凡人

【Nコード】

N04430

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

あの日、ガク・キリシマは出会ってしまった、自身の遙か上を飛ぶ鴉に

(前書き)

この話は、「アーマードコア ネクサス」に登場したレイブン、モリ・カドルを主役にした話です。

あなたとのイメージに差があるかもしれませんが、それだけはいくらも承く下さい。ではどうぞ。

ACガレージで、私は愛機の御神火が整備されている姿をじっと見ていた。

私はこれまでに、幾度とない戦いを切り抜けてきた。それも全ては、この機体あってこそその事である。

相棒とも愛機とも言えないそれは、大げさに言えば恋人に近い物になっっているのかもしれない。

だとしたら、私はひどい人間だ。その恋人を幾度となく戦いに巻き込んでいるのだから。

いや、レイブンなど、大なり小なりこんな人間ばかりであろう。あくまで差があるだけだ。そう、一言で言えば五十歩百歩だ。

私は、五十歩の方なのか、百歩の方なのか、少し気になったが、すぐに考える事をやめた。

考えても仕方がない。そんな事を考えている暇があるなら、どうやって生き延びるのかを考えている方がずっと有意義だ。

そう、これからの戦いをどう生き延びるのかを考えている方がずっと・・・

今回、私がクレストから請け負ったミッションは、ミラージユの駐

屯地を攻撃する事であった。

駐屯地にいる敵部隊の詳細ははっきりしておらず、最悪の場合はACが出てくる可能性もあるらしい。

しかし、それでも私は生き延びる自信があった。今の私なら、並のレイブン相手ならば勝てる自信があったからだ。

この程度のミツシヨンに、私以上のランカーが出てくるとは到底思えなかったからだ。

もちろん、油断も手加減も一切しない。私はいつでも全力である。

たとえ私以上のランカーが相手でも、私は生き延びてみせる・・・

そして私は今、御神火のコクピットにいた。

システム、オールグリーン。各計器に一切の異常なし。

全てを確認し終えた私は、御神火を起動させた。

ガレージのドアが開き、外には御神火を現地まで運ぶクランウェルが待機していた。

さあ・・・行こうか、私の御神火よ。

私は機体を動かし、御神火は外に出た。私達の戦場に向かう為に。

その時の私は知るよしもなかった。私が始めて・・・レイブンとして、死を覚悟する事になるうとは。

ミラージ駐屯地上空、私の御神火はまだクランウェルからぶら下がったままだ。

その態勢のまま、私のオペレーターが指示を出してきた。

「ガク、ミラージ社は、どうやらあなたと同じレイブンを雇ったようです。ですので、細心の注意を払ってください。これからあなたの機体を降下させます。どうかご武運を。」

そして私達は、戦場へと舞い降りていった。

地面に到達すると、破壊目標である駐屯地の物資と、破壊目標ではない者がいた。

私と同じ・・・レイブンであった。

青と白っぽいシルエットに、最新と思われる右手の大型なライフルと肩に付けられたマイクロミサイル。巨大なブレードと小ぶりなキャノン砲。

レイブンスアークでは見ない顔だな・・・新米のレイブンか？どちらにしても、見てくれが随分と派手な姿をしているな。

どれほどの腕を持っているのかはわからない。だが、私達ならば、きつと負けない。

そして私は、自身の得意レンジである接近戦へと持ち込もうとブーストで近づいていった。

敵は私に合わせて距離を取ろうとしたが、私がそんな簡単に逃がすと思ったか？

私は左手のハンドガンを、敵の逃げ場を押さえるように放った。

敵がそれを避けようとした先こそ、私の本命の攻撃が待っている場所であった。

右手の火炎放射器、これを浴びせれば、どんなACでも動きを止め、私のロケットの餌食になる。

私の常套手段にまんまと掛かった敵に、私は右手の火炎放射器を浴びせた・・・はずだった。

確かにそこに奴はいた。しかし、今私が見えている先には、奴がどこにもいなかった。

とっさに私は、レーダーで敵の位置を確認しようとした。

だが、確認をしようとする前に、私は間接的に敵の位置がわかってしまった。

そう、敵は上空から、私の御神火をあの右手のライフルで撃ち抜いてきたのだ。

数発ほど御神火に当たり、私は即座に距離を取った。それぐらいしかできなかった。

被弾した所は、頭部と右手辺り。右手は辺り所が悪かった為、もう使い物にならなくなっていた。

被害状況を確認した後で、私は敵の方を見た。

私は確かに敵を捉えていたはずだった。それでありながら、私は敵を見失った。そればかりか、御神火に被弾させてしまった。

私は焦りと恐怖に駆られてしまった。戦場では恐怖に駆られた者が負けると相場が決まっている。

私はどうにか自身の心を立て直し、恐怖をぬぐいさつた。しかし、焦りはまだ消えてはいない。

その残った焦りが、御神火を前へと進ませた。それが正解なのか、わからないまま。

敵は肩とエクステンションのマイクロミサイルを放ったが、迎撃装置がそれをほとんど撃ち落とし、残った物はどうにか避けていった。

これ以上の被弾は危険だからだ。

そして私は、また自分の得意レンジへと持ち込んだ。しかし、この得意レンジが今の私には一番の不安材料になっていた。

勇気を奮い立たせ、両肩のロケットを敵に放った。長年の勘からして、避けられるはずのない距離だった。

しかし、不可解な事はまたもや起きた。避けられるはずのないロケットが、避けられてしまったのだ。

そして一瞬の間をつかれ、御神火の右腕は……空へと飛んでいった。

私がそれを確認をする間もなく、次のブレードの連撃が私達を襲った。

その時であった。インサイドのナパームロケットが、私が押ししていないにも関わらず発射されたのだ。

不意を突かれた敵は、左手でそれを受け止めた。しかし、機体はナパームによって燃え上がっていった。

なぜこうなったのかはわからないが、私はこの時勝利を確信した。今なら勝てる……と。

しかし、その確信を得ていたはずの私は、気がつけばその戦場から逃げ出していた。

そうさせた理由は、恐らく御神火自身からした声であった。

これ以上戦ってはいけない。ここは逃げなさい。

それが、私に言ってきた言葉であった。通信か何かが混線したのかどうかはわからないが、確かに私は、その声を聞いた。非現実的な事であるのが、私は信じる他になかった。

そうか・・・あれが、私を超える才能であったのか・・・

今更ながら私は、その事を再確認した。いや、恋人が私に教えてくれたのだ。

その時から、私は自分の身の丈を知った。そう、私は所詮凡人なんだ・・・と。

私と対峙した、本当の天才は、今どうしているのだろうか。

この戦いの最中で、あの天才は生き延びる事ができるのだろうか。いや、そんな心配をしても仕方ない事だ。

そうだ、私はレイブんだ。明日を生きる為に、プライドも何も持ち合わせていない・・・鴉なのだ。

そして私は、今日も恋人とスリリングなデートに出かける。それが、私の生きがいなのだから・・・

今日も戦場に、鴉が飛びかっっていく。

天才と凡人 FIN

(後書き)

後書き

どうですか皆様。お楽しみいただけただけでしょうか？(> | <) /
個人的にはそこまで長くもないと思っています。それにこの話・・・
台詞があまりにもありませんね。

まあACの世界自体がそのような世界なのですから、それも仕方のない事だと私は思っています。

今回は人間ドラマよりも、あくまでガクと言う人間と、御神火と言う恋人を強調したかったのでこうなりました。ちょっとくさかったですかね(^ | ^)

それでも、個人的には好きなので、共感してくれる所があればこれ幸いです(# ^ | ^ #)

スペシャルサンクス

ガク・キリシマ 様

ガクの恋人 御神火

ガクのおペレーター

エヴァンジェ 様

エヴァンジェの相棒 オラクル

ミラージュ社

クレスト社

フロム・ソフトウェア 様

では、このような粗末な駄文をお読みいただき、真にありがとうございます。
ございました。

by 澄田 康美

P.S、作者はネクサスのミッションでガクさんに会ってません。フ
アンの皆様、ごめんなさいm () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0443o/>

天才と凡人

2010年10月14日07時54分発行